

2024年度日本天文学会天文教育普及賞

【授賞者】 一般社団法人 星つむぎの村

【活動名】 インクルーシブな社会を目指す天文教育普及活動

星つむぎの村は、『「星を介して人と人をつなぎ、ともに幸せを作ろう」をミッションにプラネタリウム、星空観望会、星や宇宙に関するワークショップなどを展開している団体』である。これらの活動は、代表理事の跡部・高橋両氏とともに、村人と呼ばれる約200名のボランティアメンバーによって行われている。現法人の設立は2017年であるが、その活動は高橋氏が山梨県立科学館に勤務していた時代に立ち上げたボランティアグループ「星の語り部」にまで遡り、その活動期間はすでに20年を超えている。

活動は出張プラネタリウム、星空観望会、手作りワークショップ、クリエイティブ・アート活動など多岐にわたるが、特筆すべきは2007年に高橋氏が山梨大学医学部附属病院の院内学級で初めて院内でのプラネタリウムを実現させてからの方向性である。その後2014年からは「病院がプラネタリウム」プロジェクトを立ち上げ、その年に計15の病院で出張プラネタリウムを実現させた。これを皮切りに病院関連施設、当事者団体、支援学校を含め新型コロナ感染拡大前の2019年には年100件に達した。

「生まれてから一度も星を見たことがない人たちも、誰もが満天の星と深淵な宇宙にひきこまれ、瞳を輝かせる」のを見て、その活動を継続してきたが、さらに自宅や病院の病室からさえ出られない人向けに「フライングプラネタリウム」も開始した。投影装置を事前に該当場所に送り、インターネットを通じたライブ配信あるいはインターネットがない環境では事前に録画した動画を再生し、夜空を天井に投影する仕組みであり、離れた場所にいる人でも同じ星空を共有できるシステムであり、コロナ禍でも活動を継続させた。2021年150件、2022年130件、2023年には147件という実績となっている。

星つむぎの村の活動は、本物の星空を見せる場を作ることにまで発展している。慢性疾患や難病と闘う子どもたち、あるいは人工呼吸器など医療的なケアの必要な子どもたちなど、通常の間では外出困難な子どもたちが、実際の星を見たり、自然とふれあったりすることができる宿泊コテージ「星つむぎの家」を、クラウドファンディングを活用して山梨県に建設し、2024年1月から宿泊受け入れを行っている。

このような星つむぎの村の活動は、ありがたい未来社会をみんなで作り上げてゆく社会運動のひとつであると言える。国際天文学連合（IAU）が2018年に策定した「戦略計画2020-2030」の5つの目標の中の3つは、「天文学のインクルーシブな発展を促進する」、「市民の天文学への関わりを促進する」、「学校教育レベルで天文学の利用を推進する」である。星つむぎの村の活動はIAUのこの目指す方向とも合致し、天文教育普及の新しいあり方、天文学と社会の関係の新しいあり方を示す先進例といえる。よって、星つむぎの村に2024年度日本天文学会天文教育普及賞を授与する。